

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
11月号

毎月23日発行
通巻387号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



イヌセンブリ 奈良市・川端一弘さん撮影(文・6頁)

平成13年11月11日 大倭会文化講演会 於：大倭大本宮拝殿

アニミズムの世界 —沖繩・龍神・・・(最終回)

—故山尾三省さんを偲びつつ—

講師 野本三吉氏

沖繩の心を日本へ

ぼくは比嘉ハツさんに、沖繩にいたらどうかと言われたのですが、何だか日本に行かなくちゃいけないというふうに思いました。それで帰る前の晩、祠に一晚こもってみたらと言われて、ミロク殿という小さな神社、と言ってもぼく一人入るだけで精一杯という小さな小屋に入りました。小さなろうそくを立て、いろんな考えたことをノートに書いていたんです。下にはコザの町が見えます。

その時に、ハツさんが、お腹がすいたらうとおにぎりや飲み物を届けにきてくれました。そしてこんな話をしてくれました。

このコザの町はアメリカ軍が入った時に、女性達がみんなアメリカ兵に犯されましてね、そして混血の子供達をたくさん産むんですね。売春宿だというふうに言われてコザの町の女性たちはバカにされるんですね。みんなからバカにされてパンパンよ何よと言われていたわけです。

ハツさんは、「あの方達がいなければこの沖繩の町の女性達は安心して暮らせなかった。それをあんな言い方をして。母の理を知っていない。女の心、母の愛がそんな形で利用されて捨てられてはならない。三吉さんはこの沖繩で母の姿を見たんですよ。沖繩の心を日本に運んでもらわなければなりません。形の上だけの復讐ではなくて、今までおし込められてきた沖繩の隠れた心を世に出して欲しい。

い。もし沖繩が死ねば父たる日本も死にます。地球そのものが死に絶えてしまいます。分かって下さいね」と言って泣かれました。

「あなたは一番暗いところに行きなさい。まだまだあなたは本当の意味で至上の愛というのを知らない」と言われたんですね。「優しさだけが愛ではない。厳しさの愛をあなたは知らない」と言われました。

そして、日本に帰ってきて、横浜の寿町という日雇い労働者の町に行きました。そこに十年、その後児童相談所に十年、そして縁あって今、横浜市立大学に十年います。

私は結婚して三人の子どもに恵まれました。私の妻は晴美というのですが、旧姓の苗字は何と岩戸というんです。まあ、ちょっと笑い話になりますが、岩戸を開いて三人の子どもが生まれたということがになります(笑)。

ぼくは、どうしても一度家族で沖繩に行こうと思っていました。ぼくの青春のふるさと沖繩に。そして、家族五人で行ってハツさんにお会いしました。具志堅用信さんにもお会いしました。家の子供達にもたくさん良くして頂きました。

ハツさんはもう力はほとんどありませんでした。世界の平和のために祈っておられました。「大難が中難に、中難が小難に、小難が無難に、戦の無い世の中にして下さい」と、渾身の力をこめて、海岸で祈っておられました。

しばらくしてからハツさんは亡くなりました。そして、その後を何と末っ子の良丸君が継いでいるのです。

ぼくが行っていた時、まだ小学生で、お母さんはこんなことばかりしていて嫌だと一番嫌っていたのですが、突然、体の具合が悪くなりまして、

頭の手術を何回もしました。体中も手術の傷だらけでした。そしてもうだめだろうと言われた時に、母の道を継ぐかどうか、神の道を継ぐかどうかという言葉があつて、もう助かりたい一心で「継ぎます」と言つたとたん翌日から元気になつてしまつた。

そして、彼は今沖繩で祈りつづけているんです。細かなことは省略しますが、五月と十一月に沖繩で陰陽祭りというお祭りがありまして、今年の五月の陰陽祭りの時、良丸君ははつきりといくつかのものを覚えてしまった。「細かい事は言えないのだけれど、三吉さん、来て下さい」と言うのではくは行きました。

彼は爆弾が落ちる姿をみているんです。それは一つはアメリカでした。もう一つはアジアの国です。その二つが同時にピカッと光つて、「多分ぼくは知らないけれど、あれだけすごいものは原爆でしかないだろうな。どうしていいか分からん」ということで、巫女さんたちに話をして、それが治まるようにということ、ずっと祈り続けて来た。

そしてもう一方では、アメリカの人とアジアの人が手をとって喜んで、肩をたたいて笑い合っているのが出てきた。うまくいったらこちらになる。何としてもそうしたい。神の世界では、もしかしたらそういうことが分かつていて、いろいろやっているのかもしれないが、人間が動かないとそういうことにはならないだろうと思う。自分にはできないし、どうしたらよいかと悶々とされていたんですね。

ぼくはその事を打ち明けられて、どう動いたらいいか、自分の中でもまだ分かりません。これは言いませんけれど、その時期まで出てきているということ。彼は非常に怖がついていま

す。しかし精一杯自分の役割を果たさなければいけないと、いろんな方達と手をつないで、できることを精一杯やっています。

今日の講演会が終わって十五日がその次のお祭りなんです。いったい何が出てくるか分からないんですけれど、私は妻と一緒にいくことにしました。

今日大倭で頂いたものを、多分そちらにお伝えすることになると思っています。ぼく自身が伝えるというより、何かつながつていくような気がします。ぼくの感じの中ではここが、大事なものをつないでくれるのではないかと思っています。

そして、これはもう世界中で、きつと同じようなことを感じていらつしやる方がいるんだろうと、何かを始めようとしている人達がいて、目には見えないけれどあちこちでいろんなことが起きていると思います。

沖繩だけが全てだとは思っていませんけれど、その中の一つを明らかにするのだろうと思うんです。すでに九月にはニューヨークでの事件が起りまして、いつ原爆が使われるかもしれないという話がどんどん具体的にたつてきているので、きつと良丸君も本当に切ない思いで祈り続けているの、だろうと思います。何ができるか、ぼくなどの動きを始めたいと思っています。

山尾三省さんの遺言

三省さんが亡くなられる前に三つの遺言をなされた。たぶん今日、三省さんはここに一緒におられるので、皆さんにぜひ伝えてほしいこと、だろうと思うんです。三省さんが言われたのは、一つ目が、どこの川の水も飲めるようにしてほしいということ。これはさつき言つた龍神そのものが立ち上がるということです。

そして二つ目は、自分の手におえる範囲の技術でエネルギーを使ってほしい。もう自分の手におえない、暴発してしまうようなエネルギーは使っちゃいけない。原子力発電所を作ったあが爆発したらいへんです。地震が起こったあが爆発しますからね。原子力発電所とか原爆というものを一切止めてほしい。

そして三つ目が、日本の憲法第九条、世界から全ての武器をなくし戦争を一切しないという、日本にしかないこの憲法を世界中に広めてほしい。これはできるだろう。今、あるんだから。そして私達はそれを守っているために、今まで戦争をしてこなかった。

しかしこの間のテロ防止法は、戦争に参加する宣言をしたと思います。十月二十九日はおそらく忘れられない日になると思います。何としても原爆にならないように、戦争にならないようにするために、私達が何をしなければいけないかは、きつと一人一人の中で知っているはず。一人一人が何かをするという役割がきつとあるはず。それを精一杯したいと思います。

アニメイズムとは

今、私の家にいろんな方達が不思議なこと訪ねてみます。この間、静岡から何組かの方がお訪ねになっていろんな話をしていかれました。おそらくみんな同じことなんです。

そして比嘉良丸君から電話があつて、何か分らないけれど、鎌倉に龍神さんを祀っている所がある。そこにぜひ行ってほしい。そこには水が豊富に流れているというのです。いろいろ調べて、鎌倉の弁財天だと思つてすぐ妻と二人で行ったんです。間違いないと思つたと思つたが、去年の十二月三十日に突然白い蛇が、昔からやつて

る一軒のお店のところに現れて、一月一日からそこにおいてあるんですね。そこに尋ねていきました。まっ白い蛇がぬけ替わりぬけ替わりしながら、今は小さいのですが二メートル以上の大きな蛇に変わるといふことでそこにおかれていました。普通、人には見せないのですけれど、どうぞ見ていって下さいといふことで、中に入って見ました。

白龍、あるいは白蛇というのは、山の神、地の神、農の神を案内すると言います。支えて案内する役だといふことなので、きつとあちこちで現れている可能性がります。すぐ、沖繩に連絡をしましたら、コザの町でも白い蛇が今年出たといふことでみんなで大騒ぎしているといふ話でした。もしかすると、そういうことはこれからあるのかなといふふうになります。

最後になります。一つだけ言つておきたいことがあります。今回沖繩に行つたとき、伊計島という所に行きました。前島というのがあつて、その洞窟へ、今度の戦争の時、二百人が隠れたんです。そして火炎放射されたのですが、入口も塞いでいて全員助かるんです。二ヶ月くらいいう城したそうですが、雨水が垂れてくるのをみんな分け合ひながら飲んで助かつた。そこがハツさんが一ヶ所だけ行つていなかつた所だといふことが分かつて行つてきました。

そこに、今年九十歳の遠山タケさんという巫女さんがいらつしやるんです。この方は二十四歳から神がかりになつて、いろんなことを覚えていまして、これをテープにとつて来ましたのでお聞かせしたいと思つた。ぼくらに通じる歌も一つ歌つてくれました。

——テープから遠山タケさんのお話と歌が流れる。(略)

美しき天然
見よや、人々美しき
この天然の織物を
手際見事に織り給う
神の御業の尊しや

この方は、いろんなことをぼくに教えてくれました。今九十歳で高齢ですから、今度沖繩に行つてぜひこの方の聞き書きもしたいと思つています。

アニメイズムというのは、全ての存在に命があり、それらが交流し、つながりあい響き合うことができるといふことです。ですから、全ての存在が実はカミナのです。だから神話の時代といふのは全てがみんな神様です。そして、どの存在にもさまざまな意味と役割があり、相互交流の中で、固有の動きを自然にするといふことになりま。

そう考えると、今、本当の意味での神話時代が始まろうとしているのだといふことを、ぼくは感じています。

どうも長い間ありがとうございました。

■編集部より

野本三吉さんの熱い想いが直接に伝わってくるような、昨年十一月の講演会でした。野本さんはこの講演の内容をそのまま生き続けるかのようになり、その後、横浜市立立大学教授の職を辞して沖繩に移り住み、沖繩大学で教職に就きつつミロク会の人達と神業をともしたりしているとのこと。ちなみに、比嘉良丸さんをはじめとする九人のミロク会の人達が、今年の八月末に大倭を尋ねて来られたのは、本紙九月号の「寸紗」で紹介させてもらった通りです。目に見えないつながりが育つてきているのを感じます。(岸田 哲)

大倭はかく歩み来たれり

昭和23年10月4日『大倭』が創刊されています。当時、法主様は三十六歳、編集人は金泉日竊さん。今回はその第9〜11号中の記事を再録してみました。読みやすいよう、常用漢字・現代かなづかいに変えています。

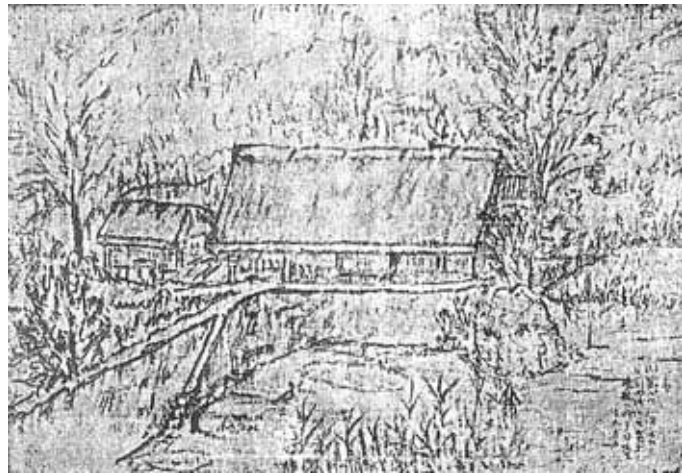
(一) 昭和24年9月4日『大倭』第9号より

昭和二十四年八月三十日は、本教教長、日聖法主の遷座の日であった。大倭教の意義深き再出発の日であったのである。神意であろう、この瑞祥大祭遷座の前日二十九日の明け方、過去二年間、法主日聖が家の子等と起居を共にしたあの懐かしき天地根元造りの簡素な住家(Ⅱ図)は一瞬にして灰燼に帰してしまった。日常生活必需品を始めとして本教の記録その他一物余すことなくその姿は消え失せてしまった。今記憶に残る過去数年に於いて本教の歩み来たった足跡を顧みて明日への指針となしたいのである。

●土中の大倭教

大東亜戦争終焉と同時に、新興日本宗教として雄々しくも澁刺として誕生した大倭教は、終戦後の社会情勢が生み出したような、時代の産物ではなく、すでにその下種は、今をさかのぼる約四十年前、法主日聖の降誕の日が始まる。それは明治四十四年十二月二十三日の未明であった。

原因なくして結果はない。矢追家に日聖降誕されたことも決して偶然ではないのである。世紀の



炎上せる大本宮仮住家(日聖畫)

英雄にしろ又聖人、賢人にしても、それは時代の産物としてその時代が生み出した流行物では絶対あり得ない。春は花咲き、秋に結実する。秋が結実させたのではなく秋に結実させる準備として春の開花があるのだ。全ての条件が具備して物は出来上がる。すべてが神ながらである。六合の基、大倭しかも大倭民族の奉斎せる大倭神宮の神苑の靈地に於いて、そして大倭の君、長曾根天皇の後胤に当たる矢追氏に日聖法主の生まれませること故なきにあらざである。

素盞鳴尊は、大倭民族の祖神にましまし、この神の血統を享け継がれて大倭鳥見に遷座された饒速日尊の子孫が、神武紀元前後の大倭の君、長曾根天皇であり、登美彦尊の別名もある。長曾根天皇は、大國主尊の靈統である因縁から同じ運命の持ち主であり、大倭地方経綸の大使命を持って大倭の地に降誕され、神武朝樹立の折、永年築き上げた大倭楽土をいさぎよく奉還された。日聖法主も又、奇しきこの因縁を持ち、長曾根天皇の靈統を享け継いで、聖地大倭しかも祖神の靈地に、そして同じ血統をひく矢追家に生まれませしものである。日聖法主の現世に於ける運命も、過去何万年継続し来たれる聖業に定められていることを知る。

大倭朝の献上によって神武朝は生まれたのであるが、長曾根天皇の子孫は大倭古神道の教えを以って常に祭祀を司り、人心の安定に寄与して来たのである。が、仏教渡来と共に、一時その影を没する形となった。

大陸文化を摂取して、日本が一段と飛躍する時機が到来した時、ここに人間としての大立者、聖徳太子の出現があった。神武朝樹立の陰の大功労者、長曾根天皇の子孫がよく神ながらの大道を護持し、歴代皇政を補佐し来たったその善根によって、長曾根天皇は聖徳太子として再誕されたのである。

この因縁を以って太子は、神道を根幹として、それに仏教を取り入れられれ宗教を以って世を治める道を講じられた。永年、推古天皇の摂政ではあったが、大國主尊や長曾根天皇の宿因のため、終に皇位に即かれることなく薨せられたのである。大國主尊の靈統は常に陰の働きを以って皇位を護り、皇政を扶翼する運命に置かれ、そして世の建て直しの過渡期にその出現を見るのである。

(一)
昭和24年11月4日『大倭』第10号より

日本における宗教改革者、日蓮(立正大師)は、仏教をして日本宗教に転化させた。鎌倉時代が生み出した聖雄日蓮ではあるが、こうした日本主義的思潮の勃興する時代に、それにふさわしい過去世の宿因のある運命の持ち主が、たまたま出現するものである。

聖徳太子は皇家に生まれ、日本に伝来の因縁のある仏教を取り入れるに大いに役立ち、その反面、仏教渡来によって日本在来の神道は一時その影を没する形となった。

神道は、大倭民族によって日本の領土に生まれた宗教であるからには、世界のいかなる宗教よりも大倭民族性に最も合致する宗教であるはずである。仏教の伝来によって、神道によりよく哲理的な説明を加え、神道の価値を一段に飛躍させたことは慥かである。こうして在来の日本宗教にさらに光明を与えるべき必然性から、仏教は全面的に日本に流入したのであるが、日本にもこれを受け入れるべき準備がすでに神の手によって用意されていた。

それは時代と人物である。だが聖徳太子も神道を没落させた罪障のために皇位にも即かず崩ぜられたのである。その罪障消滅の因縁を以って生まれ変わったのが鎌倉時代の日蓮だったのである。日蓮は前世に於いては九重雲上人として生まれたのであるが、それは仏教を日本に取り入れ、又、大陸文化を摂取する必要からであった。よくその使命だけは果たされた。

しかし、その反面、それによって犯した罪業のため、今度は房州の漁村、小湊の漁師の子供として再誕したのが日蓮その人である。かかる宿命の

もとに生まれた日蓮であったので、幼少頃より身を仏門に帰依し、生涯をこれに捧げた。聖徳太子の生涯は、仏教をして貴族社会に流布し全国各地に伽藍の建立に精励されたが、社会大衆にまで伝道布教は及ばなかった。日蓮は聖徳太子の偉業を享け継いで、当時の社会の下層階級に生まれ、貴族社会に伝道された高き哲理の仏教を平易單純に、一般社会人に身を懸けて弘宣流布に精進された。表に於いては僧侶の姿ではあるが、その裏には常に神道を説き、神仏一体の形に於いて大衆に呼びかけ、辻説法を以って布教の第一義とされた。常に折伏を以って立たれたために、その迫害も日に日に激化し流罪もしばしばあり、終には死刑の宣告にまで及んだものである。日蓮がこの迫害にひるむことなく、「これ過去世の宿因ならん」とよくその使命に向かつて一意精進されたのも、単に日蓮の信念の強さと見るよりも聖徳太子の罪障の自覚にあったのである。

日蓮によって神道は仏教を以ってその価値が十分発揮された。仏教渡来以前に於ける神道は、すべて手振り足振りやその他、形の中に無言にして秘められて来たのであるが、時代の変化に伴って智性の発達も必然的となり、もはや「ことあげせぬ神道」では物足りなくなつた。神道が完全なる世界宗教として成り上がるまでの道程として、日蓮は神道を哲理によって闡明する(※はつきりしていなかった道理や意義を明らかにすること。広辞苑より)に、大乘仏教の法華経を以ってそれに当てられ、日蓮自らも法華経の行者としてその經典を色読(※文字に書かれた事柄を、その通りに身をもって実践修行すること)されたのである。

日蓮が説かれた法華経は仏教の香りも多分にあるが、その説かれている根本は日本国を中心としての神道であり、やがてこの神道が日本から世界に

流布され娑婆即寂光土の理想実現にあった。

鎌倉時代の日蓮としての使命は完了され、次いで幾多の将来に於ける偉業を残して波瀾万丈の人生を静かに池上本門寺に於いて終わつたのであるが、日蓮が再び人界に生まれて、仏教をして完全に神道の血肉となし仏教くさくない世界宗教、いわゆる神道でなく日本神教として雄々しく世界の前に立つて獅子吼する時代を夢見ながら入寂したことであろう。

徳川時代の末期、欧米文化が怒濤の如く日本に押し寄せてきたために、国内は相当の混乱状態を現出した。しかし日本が世界の日本に伍入すべきこれが暁であり、新日本誕生の産みの苦しみでもあった。日清、日露、次いで起こつた満州事変等によって日本が世界に一躍その名を知らせ、世界の文化の水準の域にまで達する情勢を示してきた。

終には世界の強国と一戦を交えるまでに躍進し大東亜戦争を引き起こした。敗戦の結果を見たとはいえ、よく現今の科学戦に欧米の文化国をなやましたその実力に於いては、恐るべきものあるを世界に示した。これによって世界は日本を見直し、その存在、その認識をさらに一段と深めた結果をもたらした。

敗戦の日本にあつてあらゆる辛酸をなめつつも、世界の文化国家に伍すべく新日本再建に国民挙げて血みどろの奮励を続けている。こうした時代、武器を捨てた平和と日本建設には、その推進力となるものは宗教でなければならぬ。それは大倭民族の民族性からにじみ出た宗教でなくては真の日本建設は不可能である。

時はまさに鎌倉時代に似通つた昭和の今日、かつて古神道の中心であつた霊地に、日本宗教を以つて立つ日蓮の再来がなければならぬ。ここに法主矢追日聖誕の意義があるのである。(続く)

表紙
写真

イヌセンブリについて

奈良市 川端 一弘

大倭がある奈良市西部の丘陵地を西の京丘陵と呼ぶ。低くならだらかに続くこの丘陵地は、昭和30年代前半の頃は、田畑とアカマツ林が続く地であった。現在では全て住宅地となり当時の面影は消滅し、開発当初は田園都市と謳われたが、その言葉さえ失われてしまった。あくなき物質文明を希求した戦後の日本人の理想郷がこの地である。

住民となった今、少年時代に体験した自然豊かな大倭の面影を求めて、時折矢田丘陵を歩いてみる。この矢田丘陵は富雄川を挟んで、西の京丘陵の対岸に連なる丘陵で、標高が高く開発のスピードが遅れ、僅かに自然がまだ残っている。

こちら側では、かつて大倭の地にもあったセンブリが今も生育している。センブリは昔から乾燥させたものを煎じて健胃剤として利用している草である。当薬ともいう。瑞光院の茶の間でも吊るしてあるのを見たことがあり、法主さんは煎じて飲んでおられた。私もそのおすそ分けを頂き飲んでいたことがある。とても苦味がきつく、「良薬口に苦し」そのものである。法主さんは「後で口の中が爽やかになる」と苦味を楽しんでおられた。

イヌセンブリは、矢田丘陵で見つけた。センブリと同じ仲間で、両者はよく似ており区別が付きにくい(慣れてくると一目で区別がつく)が、根をかじると苦味はない。そのため健胃剤として利用されることはない。草の名にイヌという冠詞がつけられるのは、人間に利用されないためである。この草にとって迷惑な話である。

センブリが乾燥した地に生育するのに対し、湿った地に生え、その生育地は少ない。そのため近畿地方の絶滅危惧種Cに指定されている。

登美谷の名残 第10回

登彌神社

矢追隆義

我が国の政治形態は、古くは祭政一致と言われるように、政治も神を祭ることと表裏一体であった。例えば藤原氏は春日神社を鎮守の氏神として祭りきたつたように、鳥見邑においても、登美氏と称する豪族の首長が、鳥見邑の惣社(鎮守の神)として奉祀した神社(氏神)があったはずである。

一般的に考えられるのは「登彌神社」ではなからうか? 登美氏について見る時、奈良・平安時代になると殆ど活動がなく、次第に消滅していくのであるが、登彌神社は残り、しかも式内社として官祀の地位にあつたことは、江戸時代の『大和志』に「今八石木ニアル登彌神社……」と記されている。これに対し登彌神社は北倭村大字上村の長弓寺境内にある「牛王社」であるという反対説もある。

現在の登彌神社は二社から成り立っている。東社は「高皇靈神・菅田別命」、西社は「神皇産靈神・登美建速日命・天兒屋根命」を祭る。地名辞書によれば「延喜式、添下郡登彌神社、今富雄村大字石木字木嶋に在り」、この神社は式内社と認め、祭神は「登美連の祖神」とされている。また『姓氏録』には「登美連、饒速日命六世孫、伊香色雄命之孫也」とあつて、祖神は饒速日命である。

明治時代に県社となり、今でも土地の人達は登彌神社を「鳥見の明神」あるいは「木嶋大明神」と称し崇敬している。正面入口鳥居の前に木嶋屋が奉献した大きな石灯籠一対が見られる。毎年、二月一日の五穀豊作を占う「粥占い」の古式が有

直会演芸大会

■平成十四年十二月二十三日(祝日)

大倭五十九年 元旦。
法主日聖師のお誕生を記念する祭典。

○午前十時、法主様の奥津城にお参りして、午前十時三十分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

○午後一時より大倭安宿苑長曾根寮の「あじさい広場」で祝賀の直会演芸会が催されます。

○昼食は直会弁当を用意しますので、どんな様もご遠慮なくご参集下さい。

- 直会演芸会の係では、今年も出演される方を募ります。
- あなたのやりたい事をやって共に楽しませて下さい。
- 時間十分前後くらいです。
- 十一月十五日まで受け付けています。

直会演芸会実行委員会
TEL 〇七四二一四四一〇〇一 番

青山法義・中島武宣迄

名である。

尚、境内は一、七一九平方メートルもあり、隣接する「一の谷」「観音山」からは古代祭祀遺物の土器や小型土馬・和同開珎や銀銭等が出土しており、年代の古さが窺える。

寸 莎

第53回

山 崎 正 知 さん

器用さを生かす

今回の「寸莎」では、大倭の住人で、山崎工務店として大倭殖産や倭商とも仕事をしている大工の山崎正知さんに登場してもらうことにする。

今年の九月末に、大倭の杉本順一さん等九人と九州の宇佐、阿蘇、高千穂方面に短い旅行を筆者も共にしたのだが、その一行に山崎夫妻も加わっていて、談笑する機会が多かった。実は、正知さんの郷里は阿蘇郡西原村で、この旅の中でも阿蘇の山々や風物を語ってくれる口調は、いつもよりずっと弾んで生き生きとしていた。旅の途中から合流した若い女性達の間では、その長いもみ上げのある風貌と洒落た服装のセンスのために、「ルパン三世」とアニメの主人公の渾名をつけられて人気があった。



その山崎さんが阿蘇の外輪山の側の西原村で農家の三男として生まれたのは、終戦から二年目の昭和二十二年七月三十日のことである。「今年でも家から一番近いバス停まで四キロある」というから、子供時代は阿蘇の雄大な大自然から養分をいっぱい吸って育つたに違いない。父親の正義さんは、「世話好きで、綱引きの綱を頼まれて縛うなど器用な人だった」が、正知さんも、「グライダーや刀等を自分で手作りし、友達にもよく頼まれた」という器用さをこの頃から発揮していたようだ。

十五歳の春に、当時の高度経済成長期に盛んだった集団就職の臨時列車に乗って神戸に出てきて、神戸製鋼の下請会社に就職し、資材課で営繕の仕事に従事した。会社で働いて三年ほど経った頃、山崎さんの器用さと実直さを評価してくれていた上司が、「大工になる気はないか」

とすすめてくれて、神戸で大工の修業をはじめた。二、三年働いてようやく柱等に墨付けをさせてもらうという修業時代は大変だったが、「毎晩のように春日野道あたりで大工の友達と飲み歩くのは楽しかった」と笑う。

修業の三年目に弟子入りすることになった「吉田の頭領」とは長い付き合いになり、やがて大倭でも、彼の下で旧教務所や二六庵や大倭神宮の社務所等たくさんさんの仕事を手がけることになった。大倭では泊まり込んで仕事をすることが多く、大倭の住人も顔見知りになっていった。

ちょうど二六庵建設の仕事をしていた頃、山崎さんの真面目な人柄にほれ込んだ中島康治さん（倭商の現社長）は、「義妹の波留茂と結婚させたらどうか」と二人を引き合わせた。昭和四十八年三月に二人は初めて顔を合わせ、その年の九月二十九日には大倭で挙式するという順調な出発だった。

結婚後は大倭の近くの宝来や菅野台に家を借り、長女の安裕美、次女の奈紀佐と次々に子宝に恵まれたのだが、昭和五十二年九月に思いがけない事故に遭ってしまった。それまで三年間働いた小野田社寺建設を退職して、山崎工務店として独立して最初の仕事場であった新大宮の現場

からバイクで帰る途中の宝来のあたりで、「原因は全くわからずに転倒し、気がついたら西奈良中央病院のベッドの上だった」という不思議な事故だった。肩の骨折と頭蓋骨陥没という状態だったが、「手術をしなくて大丈夫だろう」という法主様の言葉もあり、一カ月余りの入院で何とかすますことができた。

法主様についての印象を聞くと、「最初は、変った人だし怖い人だと思ったが、大倭神宮の社務所の建設にかかわる頃から親しく話せるようになった。仕事に関しては、最低限の指示をするだけで、あとはすっかり任せてくれる人だった」となつかしそうに語ってくれた。

菅野台での結婚生活は八年ほど続いたが、「法主さんに聞いたから戻ってきたらいいと言ってくれたので、大倭で住むことになった」と奥さんの波留茂さんは語る。現在は、彼女の父親の青山日元さんも一緒に、正知さんが自分で建てた家に長男の将晴さんも加えて六人で住んでいる。

ここ何年かは、毎朝愛犬の「カイ」と共に拝殿の前で拍手で参拝するのが習慣となっていて、この頃はそれをしないと落着かないとのことだ。趣味を聞くと、外国映画を観ることと、やはり色々な物を工夫して作ることとのこと。（聞き手＝岸田哲）

あつたつ日記

9月6日 2カ月遅れの記事ですが、大倭殖産(株)が品質マネジメントシステムの国際規格(ISO9001)の認証を取得しました。

10月12日 奈良パークホテルで第50回目の邑交会。

福井の齋藤正宏さんが来邑して14日まで滞在。

10月13日 朝から田んぼで稲刈が行われ、子供達も交え大勢の参加を得て昼頃には終了、いつもの宴会となりました。

午後2時から拝殿で祝会。稲刈りに引き続きの参加者のため少し遅らせて開始。初参加者も何人か。日蓮上人についての勉強会として行われました。勉強会が終わろうとした時、杉本順一さんから「日蓮、大倭太加天



腹ですべてをきいておった」(ひやりとした人もいた)、
「身延で待つておる」とのお言葉があったと伝えられました。

10月15日 大倭神宮月次祭。大阪の橋本雅子さん来邑。以前、法主様や故柴地則之さんには家まで来てもらったそうです。しばらく教務所で話して帰られ、後で「自分で予期しなかった感動に涙が出てしまいましたよか」「生命を洗われた心地」とお手紙を下さっています。

10月19日 夜、交流の家でFIWC定例委員会。現在、日本でIT関連の会社に勤めているという韓国青年が静岡岡県から参加。彼は韓国キャンプでのリーダー経験者とのこと。

10月20日 杉本順一さん等は、平群谷の長屋王と吉備内親王のお墓を訪ねました。また一緒に行った林修三さんの希望で、同じ谷筋にある石床神社と櫛神社も訪ねたとのこと。

10月23日 大倭大本宮月次祭。10月24日 深夜2時頃、突然の火災警報で、雨の中、邑人達が長曽根寮に駆けつけました。幸い誤作動でしたが、無計画の計画で防災訓練となりました。

10月27、28日 大倭会の文化行事で、身延山・富士山本宮浅間神社方面へ行ってきました。参加者は44人で、その内15人がBコースで直接、下部温泉ホテル

集合。東名高速道路の渋滞で午後11時頃、奈良帰着となりました。詳細記事は次の12月号で。

10月31日 相馬敬子さんが桑木崇光君(文化講演会にも来邑)と来邑。相馬さんは菊地洋一さんと、1年間ほど宮崎県から静岡県の浜岡原発周辺へ拠点を移して活動されるそうです。

11月4日 田んぼでは前夜の雨で稲が湿ったため開始を午前11時に遅らせて、参加者20人ほどで無事、脱穀を終わりました。今年は大豊作とのこと。お米は大倭での神事に使われます。

大倭町自治会初のレクリエーションで「信貴山のどか村」へ行き、いも掘りなどを楽しみました。大人19人・子供4人が参加。昇ちゃんはんはにんじくの漬物を買って帰り、健康指向。

八尾市の押川康宣さん(キャンパーOBで元邑人)が、後藤政子さんと来邑。大倭やカミさんに関心ある方とのこと。青山日元さん・杉本順一さんが応援。

11月6日 大倭神宮月次祭。大倭殖産(株)は、厚生労働省の平成14年度建設雇用改善優良事業所表彰を受けました。石垣雅設さんが、野草社にある法話テープの一覧表を送ってくれました。オーブンリールからカセットテープへ移し済みの多数が含まれています。

11月10日 鶴見俊輔さんを講師

に迎え(写真上)、大倭会文化講演会が盛況の内に行われました。百人余りの参加者。後の懇親会にも鶴見先生は1時間ほど残って下さって、約60人が参加しました。講演内容はいずれ本紙に掲載予定です。

大倭安宿苑では
10月29日 和歌山市民生委員・児童福祉協議会から33名の見学者がありました。
11月2、3日 肌寒い天気になつてしまいましたが、文化祭が開催されました。

(菅原園)
10月20日 運動会。雨が降り出し、午後は中庭からサニールームへと移動して最後まで続けました。熱気むんむん、和気藹々!

(須加宮寮)
10月29、30日 近距離組の宿泊旅行。奈良パークホテルで温泉や宴会を楽しみ、翌日はあやめ池遊園地に行きました。

(長曾根寮)
10月19日 藤ノ木台万年青年クラブの慰問があり、様々な演芸を披露して下さいました。

(八重垣園)
10月23日 俳句の会。「木漏れ陽を集めて温し愛の園」「捨てて来し故郷想う金木犀」「コスモスを絵手紙にして無沙汰わび」
11月2、3日 文化祭に、多くの方々が押し絵、墨絵、縫ぐるみ、レース編み等々を出品。

あんない

* 金鶏祭(大倭神宮)
12月4日(水)午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭は、九州勢(神武側)が長曾根邑を攻めた際、天に示された金色の奇瑞によって両軍が戈を収めたことを記念する祭典。この金色の奇瑞を金鶏といひ、和の光の象徴となつている。『やわらぎの黙示』百二十三頁「日本精神の源流」―長曾根邑のすめらみこと―参照。

* 月次祭(大倭神宮)
12月6日(金)午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四〇九回祝会
12月8日(日)午前9時より恒例「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

* 月次祭(大倭神宮)
12月15日(日)午後2時より大倭神宮にて。

* 日聖祭(大本宮拝殿)及び直会演芸会
12月23日(祝日)大倭元旦。午前10時30分より祭典、午後1時より直会演芸会。(6頁参照)

* 大倭神宮境内・周辺大掃除
12月29日(日) 午前10時より行います。有志の皆さんはご参加下さい。昼食はお弁当が用意されます。